ALL SORTS 27

河原町と龍馬。

取材に答える赤尾氏。商店街事務所にて。大柄でちょっといかつい感じだがとても温厚な人柄。語り口は、なんとなく中島らも氏に似ている(写真右)。河原町商店街事務局の人々と、清掃作業の途中で。街の美観を守るのもたいせつな仕事である(写真中)。赤尾氏が父・兄と経営する赤尾昭文堂の店内にて。仕事柄、龍馬の資料も手に入りやすい(写真左)。これは署名用紙と記念館設立の趣旨説明リーフ。

河原町商店街青年部・会長

赤尾博章

【HIROAKI AKAO】

龍馬以外に、この街とかかわりの深い歴史的な人物　誰か思い浮かびますか？河原町とは読んで字のごとく、昔は鴨川の河原だった。この辺りは何もなっかったんです。

彼は空腹だった。そこで軍鶏でも喰おうや、と偶々遊びにきていた本屋の倅に軍鶏肉を買いにやらせた。二日前に徳川慶喜は大政奉還を発表したが、その後薩摩・長州両藩には相次いで討幕の密勅も降りていた。彼の前に居る人物、中岡慎太郎が同志たちと岩倉具視卿を動かした結果である。

この話と、新鮮組の襲撃を受け重傷を負った人物の身柄引取に関する相談が一段落した頃である。近江屋の二階で、彼、坂本龍馬は"最後の空腹"を覚えていた。

やがて、十津川郷士を名乗る人物が訪ねてきた。ほの暗い行灯のあかりの中、強度の近視だった彼は下働きの男が取り次いだ名刺を、鼻の先に付けるように見ていた。

階段の方で短い叫び声が起こった。荒々しい気配。何かが倒れた。

「ほたえなっ！」

彼は怒鳴った。だが、この怒声で刺客たちは彼の所在を察知した。気付いたときは踏み込んできた刺客の刃に、額を割られていた。彼も中岡も手元に刀を置いてはいない。中岡はなんとか短刀を手にしたが、全身を十箇所以上切られ昏倒した。彼は右肩先から左へ背骨の辺りを切り下げられ、ふたたび前頭部を切られた。疾風のように刺客が去ったあと、脳漿と血飛沫にまみれ凄惨な姿となりながら、彼は階段の上でどっかりあぐらを組んだという。

「石川ぁ(中岡の偽名)、俺は、脳をやられちょる。もう、いけん……」そして龍馬は死んだ。慶応三年十一月十五日。享年、三十三歳だった。

●

龍馬が没して百二十七年。今、京都河原町商店街の青年会に坂本龍馬記念館の建設を訴える人物がいる。青年会会長・赤尾博章氏だ。

中京区木屋町通蛸薬師角にはすでに廃校となった立誠小学校跡地がある。歴史を遡れば、そこはかつて土佐藩の藩邸があったところだ。その跡地に記念館を建てようというのである。

だが、どうして龍馬なのか。失礼ながらお会いして話を聴くまで、これは相当な龍馬オタクの情熱が為せる所以かも知れないと思っていた。

「いやあ、いわゆるマニアではないんですよ。もっと現実的なことなんですね」

赤尾氏はこちらの気持を察してか、さぐりを入れる前に？こう語った。

「龍馬と京都はたいへん関わりが深い。特に、この河原町界隈には龍馬と関わりのある史蹟も数多くあります。逆に云えば、龍馬以外に河原町界隈と関わりのある人物、誰か思い浮かびますか？河原町とは読んで字のごとく、ずっと昔は鴨川の河原だった。この辺りは何もなかったんです。

記念館の建設は、河原町商店街の活性化につなげていこうということなんです。たしかに、以前は京阪と阪急、ふたつのターミナルを結ぶストリートとして賑わってきました。とりあえず河原町に行けば何かある、何かできるという雰囲気も多くの人々にあったと思います。それを象徴していたのが、"河ブラ"という言葉ですね。

でも、今の若い人はこんなこと言わなくなったし、知らないでしょう」

氏は、河原町の通行量が、ここ数年頭打ちになっていることを感じているという。京都駅が改築され地下鉄東西線が開通すれば状況はもっと悪くなるのではないか。近ごろ排気ガスでススぼけてきた河原町の金看板をもう一度磨いて、みんなの関心を集めたい。考えた末に浮かび上がったのが龍馬なのである。また龍馬の同好会組織が全国にあり、その命日には多くのファンが京都を訪れる(龍馬と中岡慎太郎の墓は護国神社にある)ことを知ったのもこの計画をすすめる大きな動機のひとつとなった。

「東京の自由ケ丘や長崎のハウステンボスなどいくつかの町づくりを勉強しました。そしてさまざまな情報が行き交うことが地域活性化のカギになると思いました。龍馬記念館をそのきっかけにしたい。河原町を新しい文化と情報の発進源とするために、まず龍馬記念館を通して町自体がいろんな空気を呼吸できるようにすること。それを目指したいと思います」

現在、青年会では十万人署名運動を展開している。すでに多くの署名も集まり、反響も上々だ。赤尾氏ご自身は髪をオールバックにして、着物姿で龍馬に扮しながら奮闘中である。

●

龍馬と云えばお竜を忘れることができない。だが龍馬の死後、彼女の人生は幸せではなかったようだ。当初、龍馬の実家に身を寄せていた彼女は旧海援隊士の間を転々とする間に芳しくない噂がたち、坂本家と絶縁。明治十八年、横須賀で行商人と一緒になり"つる"と改名までしたが焼酎に酔っては「龍馬の妻だよ」とわめく日々だったといわれている。維新の元勲となることもなく、明治の世に忘れ去られてゆく龍馬の後姿を、かわかない涙の中で見送りつづけた彼女。もしも記念館ができれば、草葉の陰でお竜さんの溜飲もすこしは下がるのかも知れない。

●

TEXT by　三村　渓
PHOTO by　大田　メグミ

PROFILE

河原町商店街青年部・会長。現在、地域の活性化を図るため、立誠小学校跡地に坂本龍馬記念館の建設を訴える。十万人署名運動を青年部として展開、また、全国の龍馬同好会ともコミュニケーションをすすめている。

鋼陀中学校から堀川高校を経て甲南大学に進学、一度はさる大手商社に入社したが、「サラリーマンは性に合わない」と父・兄と共に稼業の古書販売店を経営。地域振興のために次々とユニークな発想を語る四十二才。